

平成七年二月二六日(日)

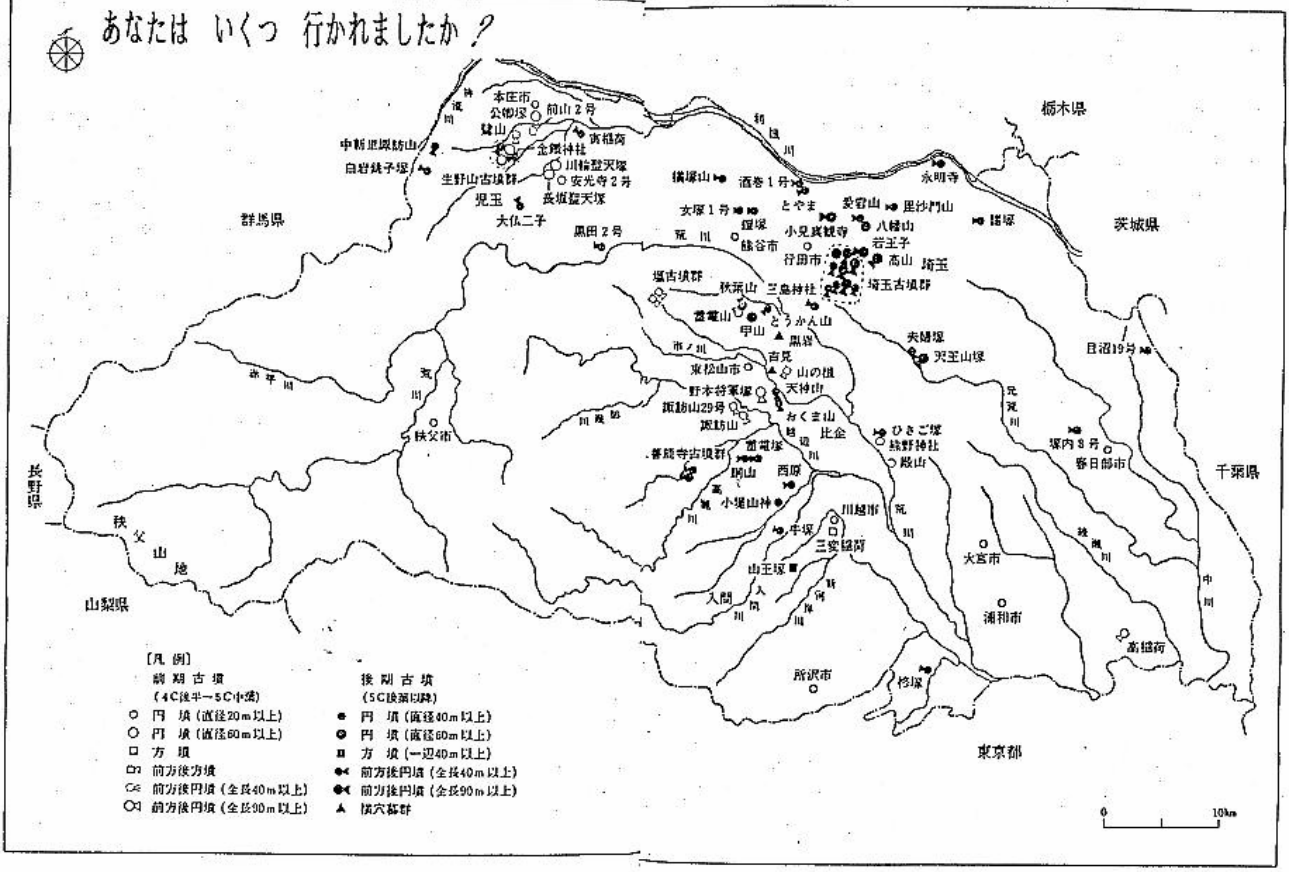
第二一七回 史跡めぐり 資料

北武蔵・謎の旅

塩古墳群・嘉禄の板碑・穴八幡古墳

越谷市郷土研究会

[遺跡分布図3] 埼玉県の主要古墳 若原真一氏作製



◎第二一七回 史跡めぐり ご案内

北武蔵・謎の旅

塩古墳群・嘉祿の板碑・穴八幡古墳

とき 平成七年二月二六日(日)

集合 南越谷駅前 午前八時

乗車 八時一五分

コース 南越谷駅||(武蔵野線)||南浦和駅||(京浜

東北線)||浦和駅||(高崎線)||熊谷駅||(

東武バス)||大沼公園||嘉祿の板碑||大沼公

園||(東武バス)||塩八幡前||塩古墳群||出

雲伊波比神社||塩八幡社務所(昼食)||塩八

幡前||(東武バス)||小川町||穴八幡古墳||

大梅寺||晴雲酒造(株)||小川町駅||(東上

線)||〔志林〕朝霞台駅||北朝霞駅||(武蔵野

線)||南越谷駅

参加費 三、五〇〇円

ご案内 宮川 進

歴史を学ぶ楽しみは、「謎をもつ楽しみ」と「謎を解く楽しみ」。

あなたも、ぜひ、北武蔵の謎、今日の謎に挑戦してみてください。

○日本で一番古くて、新しい板碑とは何でしょうか。

(これは、ちょっと不真面目でした)

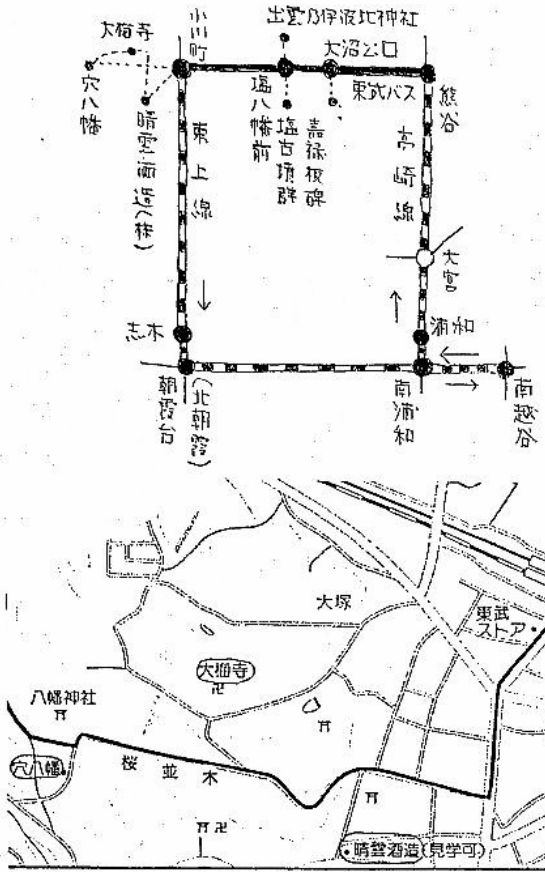
○板碑とは、誰が、どういう目的でたてたのでしょうか。

○なぜ、東国の古墳は前方後方墳からはじまったのか。

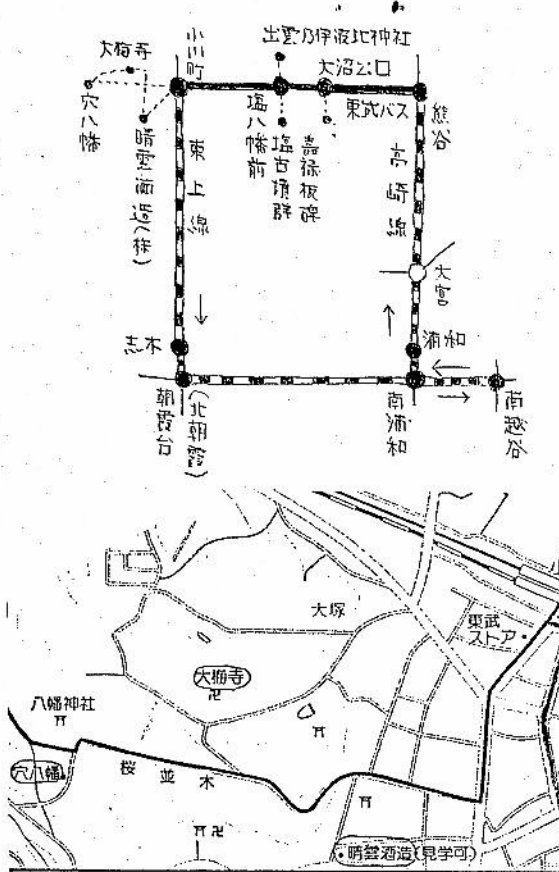
○「出雲乃伊波比神社」の「出雲」とは何か。

「伊波比」とは何か。

○双式板碑とは何でしょうか。



- 1 寺内廬寺
- 7 天神谷窯跡
- 8 西遺跡
- 9 伊勢遺跡
- 12 塩古墳群
- 10 岩比田遺跡
- 11 出雲乃伊波比神社



- 1 寺内廬寺
- 7 天神谷窯跡
- 8 西遺跡
- 9 伊勢遺跡
- 12 塩古墳群
- 10 岩比田遺跡
- 11 出雲乃伊波比神社

## 最古の板石塔婆(板碑)

埼玉県は武蔵型板石塔婆の集中地域として知られている。特に荒川の中流域には多い。板石塔婆は板碑とも呼ばれ、緑泥片岩製が普通である。この塔が造立されたのは一三世紀前半から一七世紀末頃までであるが、本県は塔の数量の多さはもちろん、最古、最新、最大、最小の板石塔婆の所在地でもある。ところで不思議というか注目されるというのか、初期の頃の板石塔婆は荒川中流域の江南町に集中している。年代順に示すと次の通りである。

- 1、嘉禄三年(一二二七) 六月銘阿弥陀三尊(陽刻)
- 2、安貞二年(一二二八) 十二月銘阿弥陀一尊(種子)
- 3、寛喜二年(一二三〇) 六月銘阿弥陀三尊(陽刻)

いずれも江南町和田川流域で発見されたもので、現在のところ最古の板石塔婆とされている貴重な塔婆で、県指定文化財となっている。

嘉禄銘の塔婆の尊像は陽刻像で、中尊の阿弥陀様は座像、大輪の蓮華の上に結跏扶座し、両手は胸の前で印相を結んでいる。前立は蓮華上の立像で合掌した観音、勢至菩薩像である。三尊とも光背を有している。

何故江南の地に初期板石塔婆が多いのだろうか。この点については先人が諸説を述べている。塔婆の原材料である緑泥片岩が入手し易かった地理的条件、仏教文化の波及等であるが、それらの条件を満たす地域は他にもある。

この頃は鎌倉幕府の創設後まだ日も浅く、北条氏が源氏三代の後を引き継ぎ、幕府の実権を掌握したといわれる承久の乱(一二二一)後間もない時期である。世情も不安定だったとみえ、一三〇〇年ごとに元号が改元されている。また在地豪族はいつ戦争にかり出されるかわからないという不安

感をもち、いったん合戦に出陣すれば生死のことも考える心境にあつたことと思う。板石塔婆の源流といわれる江南地域は、古代から男衾郡おびすまの一部であり、渡来系の壬生吉志氏みぶのきし一族が統轄していた。仏教を厚く信仰していた壬生吉志氏は土着してからも深く仏教に帰依していたものと思われる。韓国くわんこの百濟に起源をもつといわれる一一世紀頃の小金銅仏（高約一〇センチ）が、現在県内で三体確認されている。そのうち二体はこの江南地域で発見され、さらに寺内には八世紀後半より一一世紀にかけて所在したと考えられる寺跡があるのもそれを裏付ける証となるであろう。このように古くから仏教が盛んであつた地域であり、指導的立場の土豪が仏教の推進者であつたからこそ、莫大な費用のかかる大型板石塔婆の造立が可能であつたと思う。

最初は有力土豪によつて造立された板石塔婆も、やがて仏教が一般人の間に普及するとともに板石塔婆造立の風習も普遍化し、各地、各宗派に及んだものと思われる。

銘は下部中央に次のように刻まれている。

諸教所讚

多在弥陀

大才二十

嘉祿三年□月

丁亥□□

故以西方

而為一准

紀年銘の左右に天台三大部の一つである「摩訶止観」からとつた偈うたを刻んでいる。偈は經典から二―四句を抜き出して、仏の贊嘆や教えを表したもので板石塔婆にしばしば刻まれている。



日本最古、嘉禄の板石塔婆(江雨町)

\*歴史と人と 柳田敏司著



\*さいたまの名宝(国宝・重要文化財)



\*武蔵野の青石塔婆 稲村担元著

### 板碑の源流

\*仏教では「塔」をたてることは功德。

：宝塔、仏舍利塔、層塔、五輪塔など。

\*角塔婆(五輪塔を頭部に表したもの)、板塔婆がつくられた。

\*板塔婆の長いもの：長足塔婆と傘塔婆などから板石塔婆(板碑)が発生したのではなからうか。

\*供養塔である。墓ではない。それを造立する人びとはそのことによって無量の功德があると考えていた。

\*秩父の青石をもってつくられた青石塔婆が最も典型である。

秩父青石とは緑泥片岩。産出地は秩父郡の荒川、比企郡の都幾川沿岸。秩父郡野上町樋口の山中と比企郡小川町下里の横川岸に採取地が残っている。

(この他、阿波の吉野川沿岸にも産出し、同じく青石塔婆につくられている。)

\*稲村担元氏は「青石塔婆」という用語を使うべきだとしていた。こういう言葉をそれ自身つかっている板碑もあるからである。

\*こしがやしで一番古い板碑は御殿町にある建長板碑(建長元年1249)。越谷の板碑で特徴的なのは「山王二十一仏板碑」が八基あること。(全国で三九基)

## 塩古墳群 (埼玉県大里郡江南町塩)

江南町には「踊る男女の埴輪」(東京国立博物館蔵)を出土した野原古墳群をはじめ、百基を超える古墳が台地・丘陵に所在する。

塩古墳群は互いに差の少ない小規模の古墳から成り、I～VIIの支群が滑川の沖積地帯を望む見晴らしの良い丘陵に分布し、現在七十五基の古墳が雑木林に守られて残る。

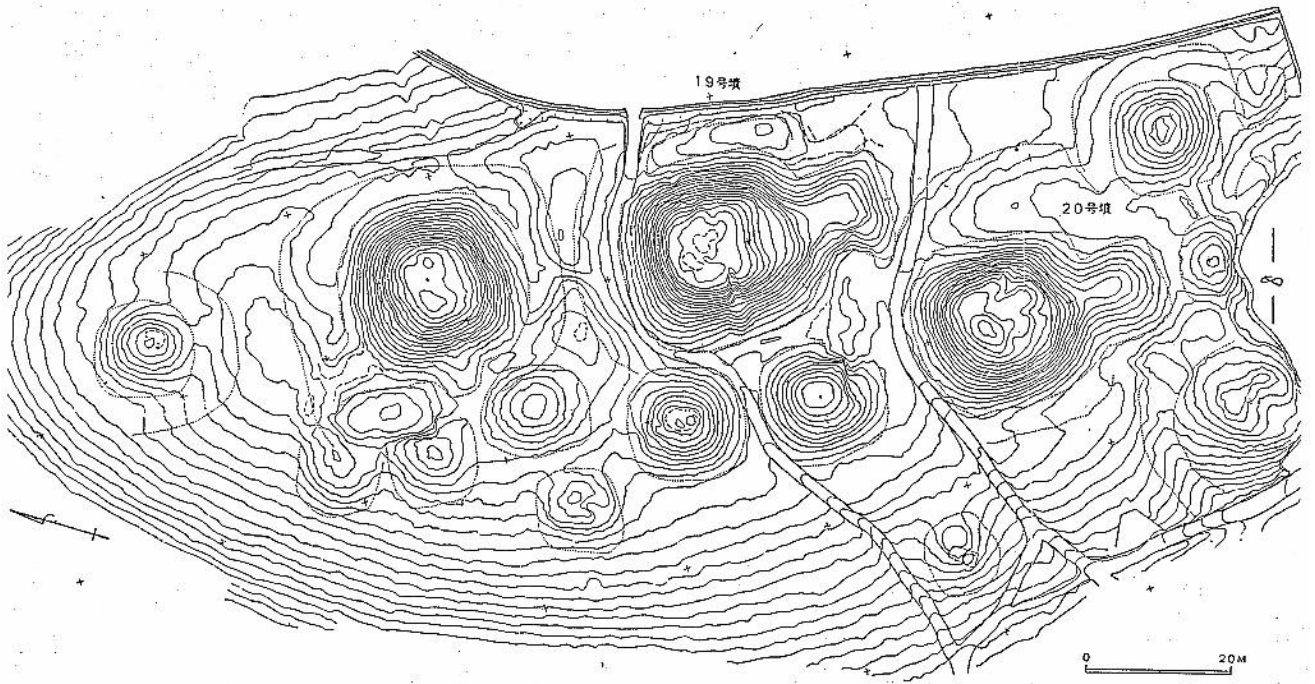
I支群是最古の古墳を含むと考えられ、規模からも群全体の中心を占めている。本支群の二十基は埼玉県史跡の指定を受け、保護されているため発掘調査を行っていない。

昭和五八年(一九八三)、菅谷浩之氏、坂本和俊氏は当時、関東地方に発見の相次いだ前方後方形方形周溝墓に触発され、本古墳群の詳細な測量を行った。その結果、I支群は前方後方墳と方墳群で構成される方形周溝墓群であるとの可能性を指摘した。前方後円墳が中心の後期古墳群(五世紀末～六世紀代)との評価をくつがえし、埼玉県内でも少ない前期古墳群(四世紀後半～五世紀初頭)とするだけに、古墳研究に大きな波紋を呼んだ。

古墳の規模は、一号墳(前方後方形)は長軸三八メートル、後方部幅二六メートル、高さ三・六メートルを測る。二号墳(前方後方形)は一号墳よりひとまわり小形である。



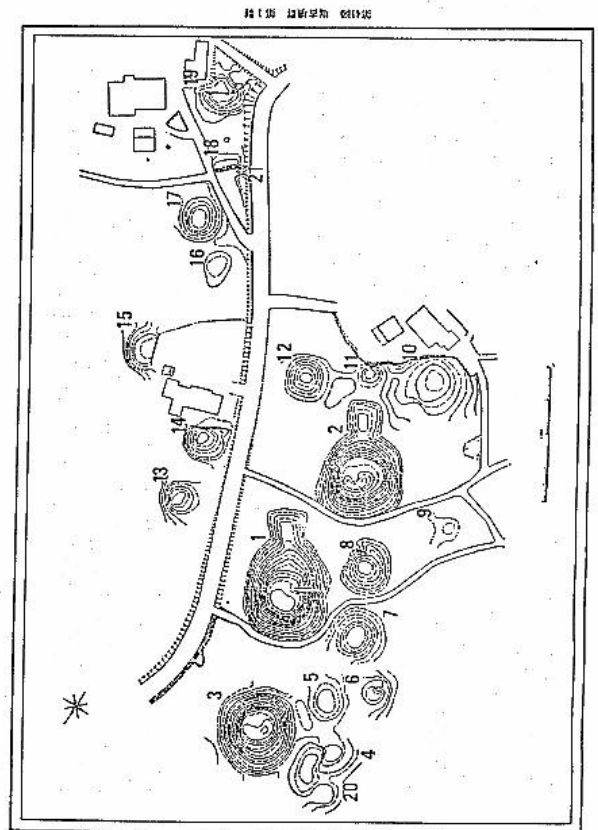




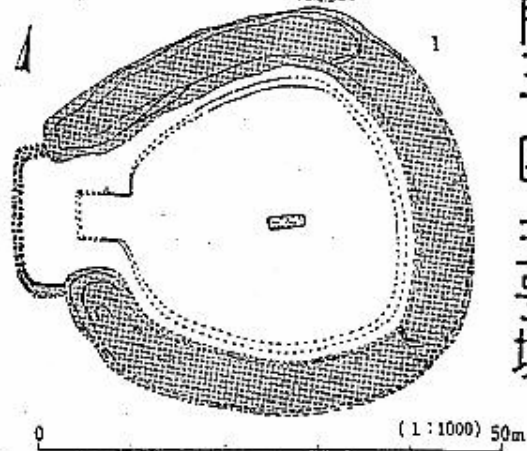
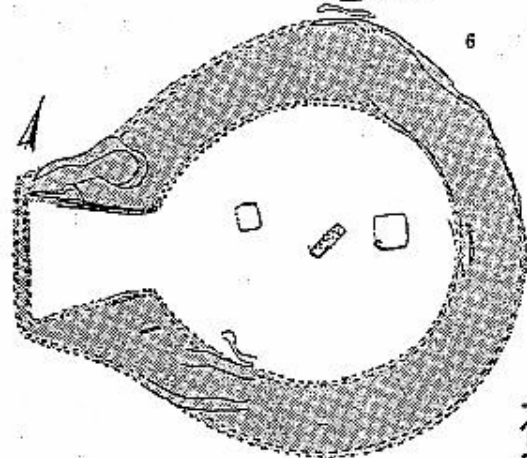
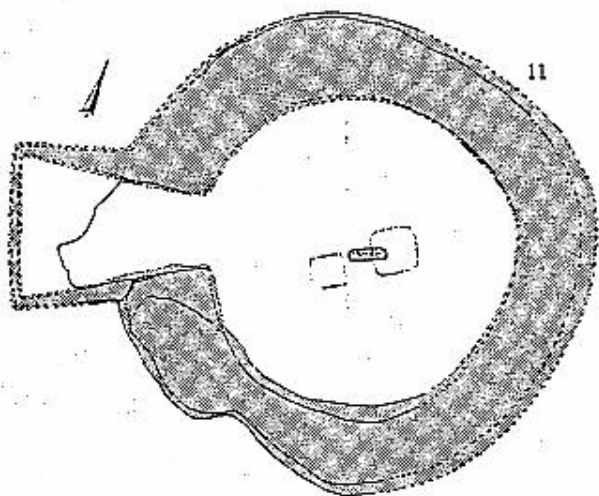
坂古墳群全測図(道路南側) 原図 坂本・菅谷 ©



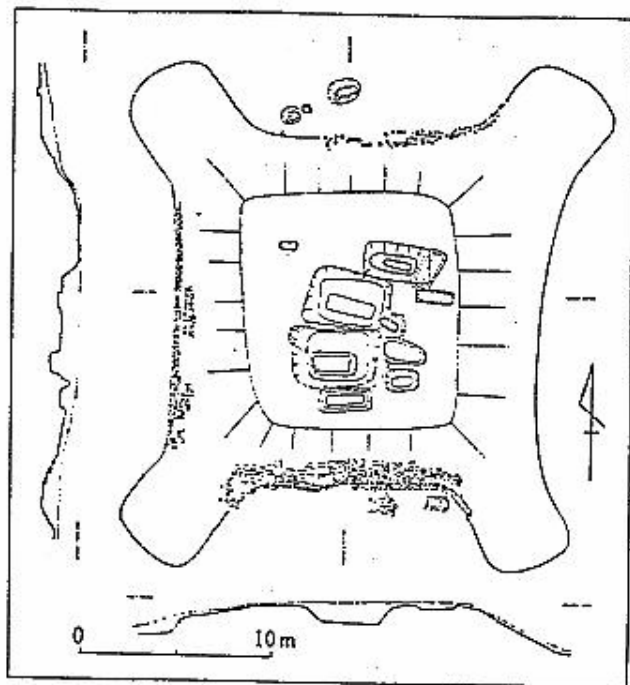
第40図 尾根古墳群分布地域の丘陵と谷津(1~V文群)



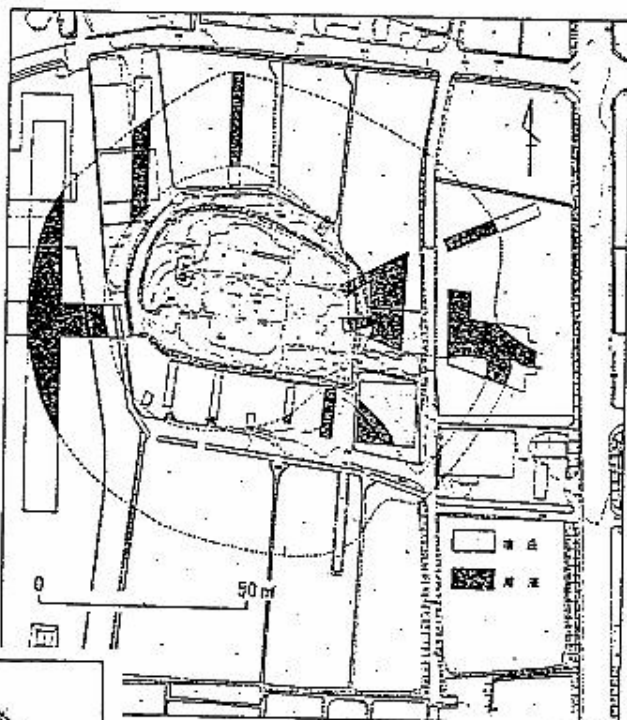
第41図 立野古墳群 全測図



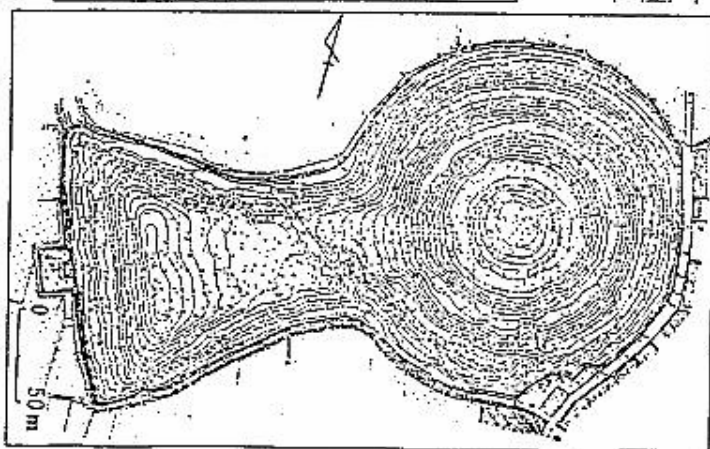
神門三・四・五号墳



四隅突出型墳丘墓 (島根県安来市仲仙寺10号墓)



縦向石塚墳丘墓



# 東日本における古墳の出現をどう見るか (抄)

## 非在地系土器の出現

東日本における古墳時代初頭の注目すべき現象の一つに、東海系、畿内系、北陸系、山陰系という非在地系土器（または外来系土器という）の出現がある。これら非在地系土器は、広く東日本から出土するが、特定地域に集中して出土する傾向がある。非在地系土器の出現をどのように理解するかが、東日本における古墳時代の開始を解く鍵であると私は考えている。

古墳時代末の東北地方、とくに宮城県で古墳時代初頭の東日本と類似する現象を見ることが出来る。つまり、官衙遺跡、集落跡、古墳などから関東系という土器が出土するのである。また、関東系土器を出土する住居跡は、カマドの構造が関東地方のそれと類似している。

古代東北地方に関する文献は多く、それによると大和朝廷の東北経営には、多くの東国の人々が移住させられるなど、東国が深くかかわっていたことが判明している。先にあげた遺跡から出土する関東系土器は、こうした東国の人々の足跡のひとつであったことを容易に想像することができよう。

ここで、古墳時代初頭の関東地方の様相を、もう少し具体的に眺めてみよう。

群馬県太田市周辺は、弥生時代の遺跡はほとんど存在しない地域であったが、東海地方西部で発生したS字状口縁甕（以下、S字甕）を主体とする遺跡が突如として出現し、S字甕は在地の型式として定着する。こうした現象は、在地の人々がS字甕を模倣して製作し使用したとは考えられず、東海地方西部からの人の移住を想定しなければ理解できない。弥生時代に遺跡が形成されなかったことは、沖積平野を可耕地とする技術が存在しなかったことを意味している。また、高崎市周辺ではS字甕の出現とともに小区画の水田が出現し、古墳時代の遺跡が急増する。このことも、東海地方西部からの人の移住に伴う新技術の導入による結果といえよう。

## 非在地系土器出現の背景

非在地系土器が集中して出土する地域は、他地域よりも一段と早く古墳時代に入ることが判明している。

このように非在地系土器が集中して出土する地域は、先進地域であったことを物語っている。また、住居形態が畿内・北陸地方のものもあることは、その地方からの人の移住を示唆している。非在地系出土の背景には、非在地系土器の示す地方からの人の移住と移動があつたものと考えられるのである。非在地系土器の出現は、一部弥生時代後期にも見られる現象ではあるが、古墳時代初期のように全国的規模で見られる現象は、それ以前には存在しない現象である。こうした現象の背景は、大和政権の統一国家へ向けての動きと決して無縁ではないだろう。

おそらく、非在地系土器が集中する地域は、大和政権の東国経営の拠点であり、この拠点を中心に古墳文化が周辺に拡大していったのである。

この地域で東日本における古墳の出現の問題を考えるうえで欠かすことができない神門三ノ五号墳が存在する。発掘担当者である田中新史<sup>たになかにし</sup>によって最近公表された三基の古墳の復元に基づく<sup>1</sup>と、五号墳は主墳径三〇m前後で、周溝<sup>しゅうこう</sup>は六mの幅でまわっている。また幅五m、長さ五mの前方部状の突出部が付き、それを入れると墳長は約三六mとなる。盛土<sup>もりつち</sup>は三・二mで、周溝底からの見せかけの高さは五・九mとなる。主体部は木棺直葬<sup>もくかんじくじょう</sup>である。墳頂部から北陸系と東海地方西部系の供献土器が出土し

ており、最古に位置づけられている。

出土土器は搬入S字甕、北陸系、畿内系土器である。これら三基の古墳の年代は、三世紀中葉前後の約半世紀と考えられている。

古墳出土の土器は葬送儀礼の祭祀に使用されたものと考えられ、被葬者とまったく縁もゆかりもない土器を使用するとは考えがたい。

神門三ノ五号墳の周辺には、東海系土器、北陸系土器、畿内系土器を出土する遺跡も存在していることから見て、その地方からの人の移住があつたものと考えていいだろう。神門三ノ五号墳は出土土器から、こうした人々によって築かれた古墳であつたといえよう。また、墳形は奈良県桜井市纏向石塚型<sup>まきむくいしづか</sup>であることから、初期大和政権との関係も無視することはできず、市原市国分寺台周辺は東国におけるひとつの拠点として存在していたのである。東国における出現期の古墳が、在地勢力ではなく、外的要因によって出現したことは興味ある事実である。

### 前方後方墳の出現

東海地方西部 東海地方西部には早くから前方後方墳<sup>ぜんぽうごほうぼん</sup>が出現し、かつその数も多い。現在のところ、愛知県・岐阜県・三重県の東海三県で三五基の前方後方墳が確認されている。出現の時期は濃尾平野<sup>のうび</sup>の土器編年で元屋敷<sup>もとやしき</sup>

前半、畿内の編年に対比すると庄内式に当たるとい  
う。実年代を与えるとすると三世紀の後半となり、全  
国でも最古に位置づけることができよう。

前方後方という形は、方形周溝墓の周溝が一部切れ  
て、陸橋を形成するものの発展形態としてとらえる説が  
有力である。また、前方後方という形の墓制には二種類  
あり、ひとつが前方後方墳で、もうひとつが前方後方形  
低墳丘墓である。前方後方形低墳丘墓は方形周溝墓群  
とともに存在する傾向が強いが、前方後方墳はそれらと  
隔絶した場所に立地する特徴をもっている。

いずれにせよ、前方後方形の墓制には二者が存在する  
わけであるが、このことが前方後方という形の墓制の本  
質を示唆しているかのようなのである。

東海地方西部において、まず前方後方墳が出現し、そ  
の後前方後円墳が出現するが、この図式は東日本に共通  
したあり方である。なぜ、最初に前方後方墳が出現する  
のか大きな謎である。

関東地方、関東地方においても神門二一五号墳を除いた  
地方では、まず前方後方墳が、その後前方後円墳が出  
現する。この現象は東海地方西部と同様である。関東地  
方では、前方後方墳として確実性の高いものは四九基あ  
り、数では東海地方西部を凌駕している。

また、関東地方の前方後方墳の大きな特徴のひとつと

して、初期の前方後方墳からは東海系土器が出土する確  
率が高いことをあげることができる。たとえば、埼玉県  
東松山市諏訪山二九号墳では、駿東地方の大廓式が、  
群馬県高崎市元島名将軍塚古墳では伊勢湾型壺といわ  
れるものが多量に出土し、東海地方西部の元屋敷期の新  
段階に相当する。また、栃木県では那須郡小川町駒形大  
塚古墳、那須郡湯津上村下侍塚古墳、宇都宮市茂原愛  
宕塚古墳・大日塚古墳、足利市藤本観音山古墳からも東  
海系土器を出土している。その他、長野県松本市弘法山  
古墳からも東海地方西部の元屋敷期の土器が出土してい  
る。

これらの古墳はいずれも確認調査あるいは発掘調査さ  
れた古墳であり、今後の調査の進展によつては、さらに  
東海系土器を出土する前方後方墳が増加することが予想  
されるのである。

これら前方後方墳の出現の時期であるが、出土土器か  
ら見て三世紀末には出現し、四世紀後半には築造を終了  
するようである。

## 最初の古墳はなぜ前方後方墳か

東日本ではほとんどの地方で、最初に出現するのは前方後方墳であることが明らかになっている。しかもその時期は、従来いわれているよりも古く、東海地方西部では三世紀後半、関東地方においては三世紀末、また中部・北陸においても三世紀後半には出現する。

現在のところ、前方後方墳の発生地がどこであるか、一元的かあるいは方形周溝墓の発展形態として多元的に発生したのかは不明であるが、東日本の前方後方墳は東海系土器が出土するものが多いことから、とくに東海地方西部との関係を抜きに論ずることはできないだろう。

東日本で前方後方墳が出現する時期は、全国的に非在地系土器が出現する時期でもある。その背後に、私が想定するように人の移動と移住があったとするなら、古墳時代の開始に向けて、いまだかつてない規模で人が動いたことになる。こうした人の動きが無原則に行なわれたのか、あるいは管理されて行なわれたかは大きな問題となるところである。

まさに前方後方墳が出現する直前に、奈良県纏向遺跡が形成される。纏向遺跡は大規模な遺跡で、都市的機能を有した最初の遺跡といわれており、九州地方と北関東以北の地方を除いた地域の土器が出土している。このことは、纏向遺跡の形成のために、大和に全国的規模で人

を動かした権力が発生したことを意味している。そして、この地に前方後円墳の初源形態を有している纏向石塚古墳が出現するのである。この墳形が千葉県市原市神門三ノ五号墳に現れるのである。

このように考えると、東日本の前方後方墳の出現は、出土土器から見ても東海地方西部の勢力が深く介在していたものの、その背後には大和政権の存在を無視することはできないのである。かつて私は、こうした前方後方墳の被葬者を大和政権によって東海地方から派遣された將軍という、いわゆる「將軍説」を唱えたことがある。

これに対し多くの批判も寄せられているが、前方後方墳の出現期はS字帯が各地から出現する時期にも相当し、東海地方西部の勢力の影響を抜きに前方後方墳の出現は考えられないのである。

## 前方後方墳と前方後円墳

前方後円墳は古墳時代を通じて存在し、墓制の主体を構成していることから、古墳時代は「前方後円墳の時代」ともいわれている。また、前方後円墳は規模・内容から見ても前方後方墳よりまさることから、前方後方墳は前方後円墳より一ランク下の古墳に位置づけられている。

最近、吉備地方の前方後方墳の平面形態は、大和の主要前方後円墳を縮小して企画されたという研究がある。

定形化した前方後方墳は、大和の大規模古墳と平面形態の類似性を認めることができるとなると、東海地方西部だけとの関係では論じられないのである。

前方後方墳と前方後方墳の性格の違いについて、前方後方墳を譜代大名<sup>ふだいだいみょう</sup>、前方後方墳を外様大名<sup>とさま</sup>に置き換えて比喩する場合もある。東日本を見る限り、最初に前方後方墳が出現し、その後前方後方墳が登場する構図は崩れない。東日本の古墳時代初期は、まさに前方後方墳の時代であった。

おそらく、前方後方墳は大和政権により全国的な前方後方墳体制が確立される以前の、そして地方が直接大和政権との関係を結ぶ以前の墓性であったと思われる。前方後方墳という墳形の伝播<sup>でんぱ</sup>に東海地方西部の勢力が深くかかわっていたことは、地方と大和政権中枢との間に東海地方西部の勢力が介在していたと考えてよいだろう。その後、大和政権の進出により、在地首長は大和政権との関係を結び、大和政権の墓性である前方後方墳を築くようになり、前方後方墳は姿を消していくのである。

(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 高橋一夫氏)

# 埼玉県の古い古墳

		しせに	ごせに
山の根	香見	←→	
諏訪山29号	東松山	←→	
塩古墳群	江南	←→	
鷺山	見玉	←→	
進守神社	碓川	←→	
諏訪山	東松山	←→	
三笠権阿神社	川越	←→	
殿山	上尾		←→
長沖・高柳石段群	見玉		←→
鷺山古墳群	見玉		←→
赤坂天神塚	美里		←→
宮原山	東松山		←→
大久保山石段群	本庄		←→
月の輪石段群	滝川		←→
滝相大久保石段群	滝川		←→
金饗神社	見玉		←→
野本持重塚	東松山		←→
こまにま石段群	行田		←→

○箸墓（3末または4初）

○亀甲山（東京・5前）

○宝来山（東京・4後）

○朝子塚（群馬・4末5初）

○太田天神山（群馬・5後）

○大山（仁徳陵・5中）

上表のうえ四つ、「諏訪山29号」（去年2月）、「山の根」、「鷺山」と「塩古墳群」が埼玉県で「一番古い」「四つ」の古墳です。

しかし、こういうことがわかったのは、ごく最近のこと。今でこそ、これらは、いずれも「前方後方墳」とされていますが、ちょっと前の本をみると「円墳」とか「前方後円墳」とかで説明されています。

古墳の形が「前方後方墳」とわかり、採取された土器などから「最古」という折紙がつけられました。

時代は古墳時代前期、4世紀中頃といわれています。

ところが、本当に、ごくごく最近、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の高橋一夫氏は、土器の研究から、「これらはもっと時代が遡り、3世紀末から4世紀はじめといってもよいのではないか」といわれています。

そうなると、卑弥呼の墓だという説もあり、日本で最古の古墳ともいわれている奈良県橿原市の「箸墓古墳（箸中山古墳）」も3世紀末から4世紀はじめのものとされており、畿内と東国の古墳成立の時期が非常に接近することとなります。



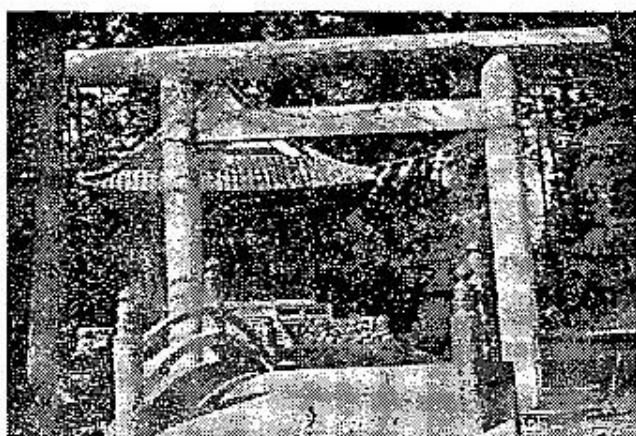
## 出雲乃伊波比神社

現在の神社

和田吉野川の上流は、すでに述べたように、和田川と吉野川の二つに分かれているが、その和田川のもとと水源に近いところに、式内社出雲乃伊波比神社がある。

その所在地は、埼玉県大里郡江南村大字板井である。すなわち今日では大里郡に編入されているが、むかしは男衾郡に属し、当社も、『延喜式』神名帳の武蔵国男衾郡三座のうちの一座である。(二三九頁地図参照)

社前に二メートルほどの幅の小川がながれている。これが和田川の水源にちかいところである。その小川の上に、小さな太鼓橋がかけてあり、八雲橋と呼ばれている。境内は四千平方メートルほどあり、老杉が林立して古社の面影がある。社殿は間口三間、奥行六間の一棟で、入母屋造り、屋根は茅葺きで、向拝も廻り縁もなく、質素で古風な建物であったが、昭和四十年にふたたび訪れてみると、修理をほどこし、屋根は立派な瓦葺きとなり、見ちがえるようになっていた。



出雲乃伊波比神社

祭祀の由来

当社の祭神は、いまは武甕槌命たけみかづちのみこととなっているが、私見をもってすれば、入間郡の出雲伊波比神社と、もともと同一祭神であろう。入間郡宮寺でアメノホヒノミコトを奉祭していた出雲祝氏の一族が、入間川を下り、和田吉野川に沿ってさかのぼり、横見郡黒岩の地に転住し、同じ氏神を祀ったのが伊波比神社であったような気がする。さらにその一族に属する

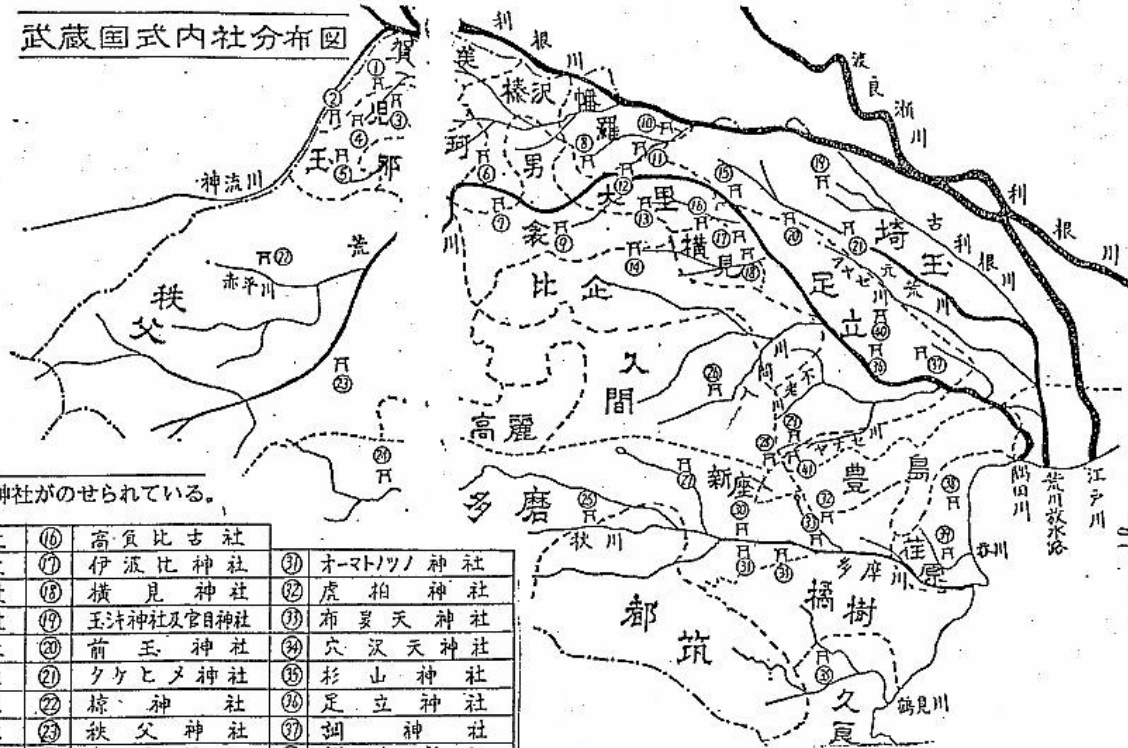
者らが、また和田川の水源に近い板井までさかのぼり、ここに落ちついて、やはり同じ氏神を祀ったのが出雲乃伊波比神社ではなかるうか。

出雲伊波比神社は天平勝宝七年（七五五）官幣に預っているが、一方伊波比神社のほうは、それから九十四年を経た嘉祥二年（八四九）に、従五位下を授けられている。おそらく同社は、その後初めて官社に列せられたのである。当時の武蔵国司が、黒岩の神社を官社に記帳方中央に申するに際し、すでに官社に列せられていた出雲伊波比神社と区別するため、単に伊波比神社の社名をもってしたものと考えられる。また板井の神社の官社に列せられた年月については、記録に残されたものがないが、伊波比神社より後のことと思われ、その名も、前二社と区別して、出雲乃伊波比神社として上申したのであらう。

『延喜式』（しんぎしき） 神名帳（しんめいぢょう）に登載される社を式内社（しきないしゃ）といい、これに載る神が神祇官より祈年祭の幣帛に預った。しかし、このほか、神名帳に登載されなかった社も数多くあった。天平五年（七三三）に編纂された『出雲國風土記』（いずもくにふんどぎ）に載る神社数を見ると、総社数が「三百九十九所」あり、このうち、「一百八十四所（しんげい）に（しんげい）二百一十五所（しんげい）とある。そのことからみると、神祇官より幣帛を受ける社のほかに、多くの社があったことがうかがえる。

武蔵国で、神名帳に載る神は、「四十四座（大）」で、東海道では遠江國（とんげい）の六二座について数が多い。東域では四座中三三座を占め、このうち、氷川神社や金佐奈神社（きんさな）の二大社を含んでいる。このことは、武蔵国が朝廷の東國關発拠点として重要視された地域であったばかりでなく、勢力のある祭祀集團（豪族）が数多く存在したことを物語っている。

武蔵国式内社分布図

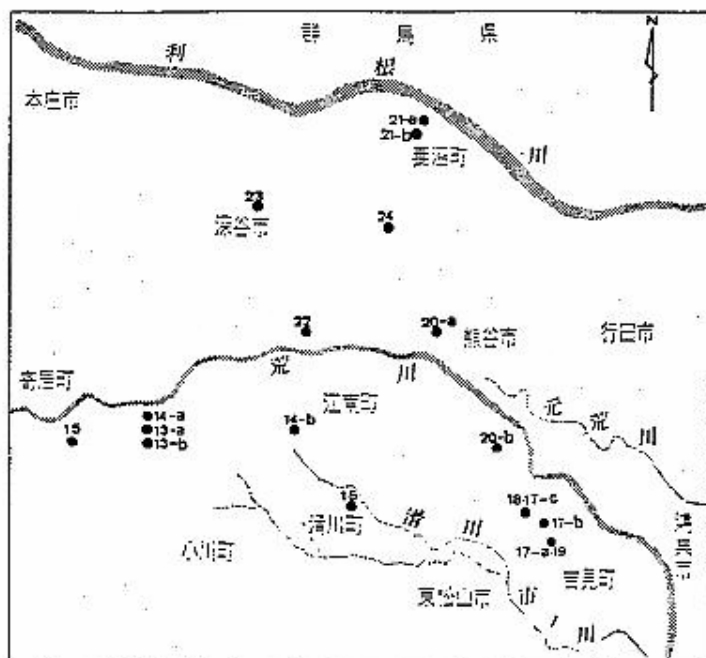


武蔵国式内社一覧

以下のとおり、43の神社がのせられている。

① 長幡部神社	⑩ 高負比古社	⑳ オマトノソノ神社
② 稲実池上社	⑪ 伊波比神社	㉑ 虎拍神社
③ 稲実荒御魂神社	⑫ 横見神社	㉒ 布多天神社
④ 今城普八坂稲実神社	⑬ 玉汁神社及官目神社	㉓ 穴沢天神社
⑤ 金佐奈神社	⑭ 前玉神社	㉔ 杉山神社
⑥ ミ力神社	⑮ タケヒメ神社	㉕ 足立神社
⑦ 稲乃売神社	⑯ 榛神社	㉖ 調神社
⑧ 楡山神社	㉑ 秩父神社	㉗ 磐井神社
⑨ 小坂神社	㉒ 青渭神社	㉘ 湍田神社
⑩ 白カミ神社	㉓ 所伎留神社	㉙ 氷川神社
⑪ 奈良神社	㉔ 広瀬神社	㉚ 中氷川神社
⑫ 田中神社	㉕ 阿豆佐味神社	
⑬ 出雲乃伊波比神社	㉖ 出雲ノハヒ神社	
⑭ 伊古速御玉比売神社	㉗ 鞆部天神社及国魂神社	
⑮ 高城神社	㉘ 小野神社	
		㉙
		㉚
		㉛
		㉜
		㉝
		㉞
		㉟
		㊱
		㊲
		㊳
		㊴
		㊵
		㊶
		㊷
		㊸
		㊹
		㊺
		㊻
		㊼
		㊽
		㊾
		㊿

男衾郡・比企郡・横見郡・大里郡・幡羅郡の式内社分布図



No.	旧郡名	社名	所在地
13-a	男衾	小被神社	寄居町富田字宮前
13-b	男衾	小被神社	※寄居町富田字塚越
14-a	男衾	出雲乃伊波比神社	寄居町赤浜
14-b	男衾	出雲乃伊波比神社	江南町板井
15	男衾	稲乃売神社	寄居町木持
16	比企	伊古乃速御玉比売神社	滑川町伊古
17-a	横見	横見神社	吉見町黒岩
17-b	横見	横見神社	吉見町上細谷
17-c	横見	横見神社	吉見町田甲
18	横見	高負比古神社	吉見町田甲
19	横見	伊波比神社	吉見町黒岩
20-a	大里	高城神社	熊谷市本町
20-b	大里	高城神社	大里村高木
21-a	幡羅	白髪神社	妻沼町妻沼字女体
21-b	幡羅	白髪神社	※妻沼町妻沼字大我井 大我井神社
22	幡羅	田中神社	熊谷市三尻
23	幡羅	楡山神社	深谷市原郷
24	幡羅	奈良神社	熊谷市中奈良

穴八幡(あなはちまん)古墳(県指定史跡)

比企郡小川町増尾字岩戸

八高線・東武東上線小川町駅の南西約六五〇メートル、  
槻川の広い沖積地を眼下に臨む標高約一〇〇メートルの丘  
陵上に所在する長径二四・九メートル、短径一六・四メー  
トル、高さ五・七メートルの円墳である。墳丘の南側に  
は、同町の下里で産出された下里石と呼ばれている緑泥片  
岩の一枚石を利用して構築された横穴式石室が開口してい  
る。『新編武蔵国風土記稿』にも「村ノ北ニアリ。径リ十  
間。高二三間ノ塚ナリ。寛文中坪井次右衛門ガ。当所ノ  
御代官タリシ時。村民等コノ塚ヲ切崩シテ。陸田トナサン  
トセシニ。左ニ図セル如キ。石室現ハレシユヘ。其事半ニ  
シテ止タリシト云。石室ノ奥行四間許。内法ノ高サ六尺。  
幅五尺余、総テ青石ヲ以疊ミ上ゲ。又同シ石ノ五六寸角ナ  
ルモノヲ。柱石トナシテ。所々ニ設ケタリ。(後略)」とあ  
り、古くから知られていたものである。

昭和四五年六月、東洋大学考古学研究会の有志が、この  
石室を実測している。それによると、全長約八・二〇メー

トルで、玄室は奥室と前室の二室からなっている。

奥室は、奥壁から玄門の内側まで二・五〇メートル、玄  
門の外側まで三・五〇メートルである。壁はほぼ垂直で幅  
は一・六五メートルである。奥壁は緑泥片岩一枚、側壁は  
左右とも二枚である。前室は、玄門の外側から羨門の内側  
まで一・九〇メートル、玄門の外側まで二・八〇メートル  
である。幅はほぼ一定で一・六六メートルである。側壁は  
左右とも緑泥片岩二枚を上下に横に並べている。羨道は、  
長さ一・九〇メートル、幅一・七五メートルで、左右とも  
緑泥片岩一枚を立てている。天井は、緑泥片岩五枚を用い  
て架橋され、玄門、羨門の部分は低くなっている。

この石室からの遺物は明らかではないが『新編武蔵国風  
土記稿』によると、水晶の数珠玉に似たものが出土したこ  
とが知られる。また、墳丘には埴輪の装置はない。

この古墳は七世紀初頭から中葉の築造とされている。

芹沢範子・長内順子「穴八幡古墳(埼玉県比企郡小川町)の石

室」『台地研究No.19 昭和四六年』



### ■大梅寺

山号は拈花山、曹洞宗の古刹で、仁治三年（一二四二）、猿尾氏が創建し、栄朝によって開山されたと言われている。

陣屋跡の丘を下ってから、平行する左の坂道を上り切った所で道は二手に分れる。右の道を下ると大梅寺の山門はすぐだ。扁額の文字が難しい。拈花山ねんげさんと読む。「拈花微笑」のお釈迦さまの故事からとったものという。門前に二十二夜文字塔。参道に、青面金剛三猿の庚申塔、一六〇〇年代末頃のものと思えるのだが銘が読みとれない。他に寛政六年（一七九四）如意輪の百番供養塔、六地藏なども立つ。

本堂に向かって左手に、暦応二年（一三四一）（二年は四年のこと、四の字を嫌ってこのように記すことが多い）キリク阿弥陀主尊、梵字光明真言を四行ずつタテ書きした双式板碑が、自然石を積重ねた基壇上に立つ。国の重要美術品の指定を受けている立派な双式板碑である。文政年間に至って、背面が三界万霊塔として使われたが、表面の本来の板碑部分を改刻されなかったのは不幸中の幸いだった。

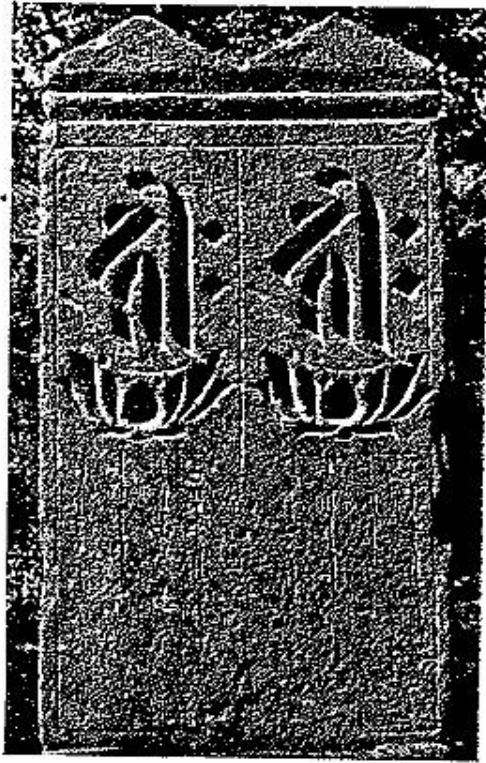
傍に立つ石の説明では「板石塔婆」となっているが、本稿では「板碑」の名称を使うことにする。双式板碑は別名「連碑」ともいうが、ここのように二連ではなく、三連のもの、さらに七連という珍しい連碑も、ここから程遠からぬ東秩父村浄蓮寺にある。連碑には一石ではなく、別々の二基になっている形式のものもある。今回のコースからは少々外れるが、同じ小川町中爪なかつづめの普光寺にある貞治五年（一三六六）のものがそれである。

【町指定文化財】

考古資料・大梅寺二連板石塔婆 一基

所在地 小川町大塚四七〇 大梅寺

昭和五年三月一七日 指定



勸進録によると「拈花山大梅寺は、仁治三年猿尾氏が靈山院祖榮朝禪師を請して創建、鎌倉幕府滅亡の折將軍守邦親王、正慶中当地に下向、王病歿のため大梅円了長老引導し坂下に葬る。」とある。

この塔婆は本堂前の記念碑裏手積石の上にある文部省認定重要美術品、昭和十六年四月九日、という標石の右側に建ててある。

形態は頂部に山形を二つ並べた一石二基の塔婆で二連塔婆中、典型的なもので極めて稀な存在である。台上高さ九五センチ幅上下とも五五・三センチ、厚さ五センチ上部に二条の切り込みがありその下に阿弥陀一尊種子を左右の蓮台上に載せ、四行宛光明真言を刻み中央に、曆應二年十月日と紀年銘があり、敬白の白字の第一画が僅かに残っている。

二連塔婆は夫婦関係の供養塔といわれる。この塔の被供養者、供養者は不祥であるが、両親のために孝子が営んだものと推察される。伝来については、郷土史家、大塚仲太郎氏は大塚陳屋台から出土したと語られていた。

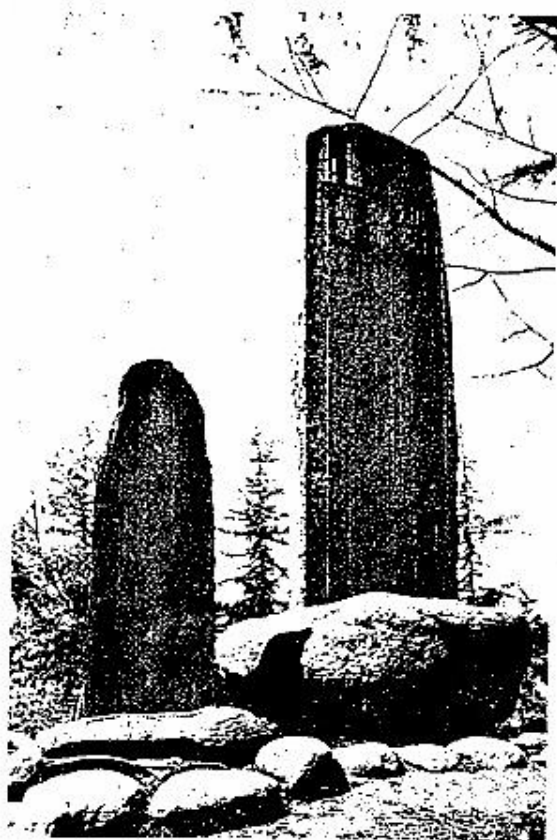
裏面の追刻によると一六五年以前に当寺の境内にあったことが理解される。裏文は下記の通り、

「三界万壺塔前大乘九十二翁愍禪書文政六癸未年七月十六日拈花山大梅寺十一世富參栄叟」と刻す。

【県指定文化財】

## 旧跡・仙覚律師遺跡

所在地 小川町大塚三五一ほか  
昭和三十六年九月一日 指定



仙覚は初め鎌倉比企谷新釈迦堂の僧坊に居り、萬葉集の研究に専念していたが、喧騒な政治の中心地を離れて、武蔵比企郡の増尾に来てこの大業を完成したと伝えられる。

仙覚の生地は茨城県で建仁三年（一一〇三）の生れであるといわれ、没年は不詳である。

仙覚は萬葉学者慈覚の門人で天台宗の僧侶であり、寛元四年源親行の書写本を底本とし十数種の異本を参照の上、読み方のわからなくなっていた一五二首を新たに読めるように成し遂げ、翌年それを「仙覚奏覽状」とともに後醍醐天皇に奉獻した。上皇は嘆賞のあまり仙覚の歌一首を続古今集に載せ、さらに御製一首を賜わったといわれる。

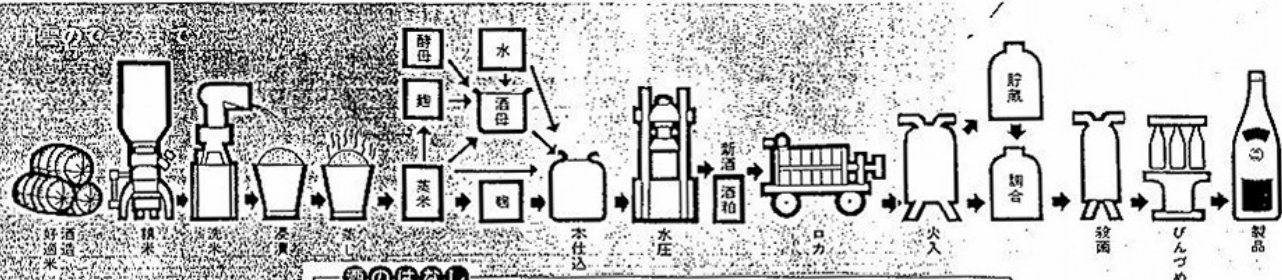
その後も校訂を続け、さらに文永六年（一一六九）四月二日「萬葉集註釈」一〇巻を完成したのは六七歳の時であり、詩に東歌に力をそそいだ。

萬葉集の基礎研究の画期的な大業績を為し遂げた場所が増尾であるということは、第二巻、第六巻、第一〇巻に記入されており、第一〇巻の巻末に左の通り記されている。

「文永六年孟夏二日於二武蔵國比企郡北方麻師宇郷政所一  
註レ之了 権律師仙覚 師」

麻師宇郷は現在の増尾を中心とした地域であり、政所の所在地にはなを二三の諸説がある。





## 糖化とアルコール化を同時進行させる 日本酒の造り方

酒造りは大きく分けると7段階、精米・洗米・蒸米・麹造り・醸造り・仕込み・圧搾。その工程は昔も今も変わりないが、機械化がかなりの部分で進められている。

①精米 酒造りの第一歩。原料米となる玄米の外側を平均して25〜30%ほど削り取る作業。かつては石臼に入れ杵でついたが、天明年間（1781〜1788）にかけて水車による精米が盛んになり、現在では大型な機械精米機が工場、往時の米揚ぎでは考えられない大量精米が可能になった。

②洗米 精白した米を水で洗いながら糖を落とす。さらに約20分間ほど水に浸ける（浸米）。寒造りの酒にとってこの冬場の洗いは、蔵男たちのつらい作業のひとつだったが、今では次の蒸米まで機械化が進んでいる。

③蒸米 浸漬した酒米は高温の蒸気を吹きつけて蒸し米にする。蒸し加減は杜氏の腕のみせどころ。ひねり餅という、蒸し米の一部をとり、手でまるくのぼしてみながらその具合を測るのも独特。

④麹造り 蒸し米に麹菌を入れて繁殖させる工程。28℃前後の釜と叫ばれる清潔な釜内で行なわれる。麹の発酵で釜内はじつと

するほどに温度があがる。

⑤醸造り 酒母造りの工程。現代では遠慮瓶が主流。麹、蒸し米、水混ぜよく攪拌し、一定量の酒液を加え10日間ほどじっくり混ぜ、25℃に保つよう暖気樽（湯を入れた桶）で発酵する。生飯づくりや、擦りすりつぶす工程だけを省略した山廃醸造など、昔ながらの手造りを守っている酒蔵もある。

⑥仕込み 麹と飯にさらに蒸し米、水を加える工程だ。麹の酵素が米の澱粉を糖に変え、同時に酒母（他）の酵母がアルコールを醸造する。普通は原料を3度に分けて仕込み、③既仕込み一能がよくできるように入られる。こうして造られた醪はタンクや桶に入られ、醗酵する。このときの泡のつき具合が酒母の味と香りを生み出す。この期間は約15〜20日。

⑦圧搾 醗酵が終わった醪を搾り機で酒と酒粕に分ける工程。かつてはテコの原理を利用して絞っていたが今はほとんど機械。原酒がこの段階の酒。このあと一度ろ過し、殺菌のため火入れし、ふたたびタンクにもどされ貯蔵熟成。後はビン詰め出荷となる。

● 埼玉の清酒一覽

支部別	番号	銘柄	醸造元	住	所		
浦和	1	旭 正 宗	内 木 酒 造 (株)	浦和市大字西堀905	☎0488-62-5734		
	2	橋 光	橋 光 酒 造 (株)	大宮市三橋町6の1737	☎0486-24-8252		
	3	九 重 桜	大 滝 酒 造 (株)	大宮市大字藤子663	☎0486-83-3006		
	4	宮 正 宗	(株)小山本家酒造	大宮市大字指扇1798	☎0486-23-0011		
	大	5	栄 鯛	(有)笹川酒造場	上尾市受寄2丁目1番27号	☎0487-71-0051	
		6	東 寿	小 林 酒 造 (株)	上尾市仲町1丁目2番1号	☎0487-71-0054	
		7	い 一	(株)い一酒造店	上尾市大字上尾村1080の1	☎0487-71-0039	
		8	文 楽	北 西 酒 造 (株)	上尾市上町2丁目5番5号	☎0487-71-0011	
		9	長 瀬	八 木 醸 造 (株)	浦和市寺2丁目1番7号	☎0487-71-1227	
	宮	10	朝 日	秋 笹 醸 造 (株)	鴻巣市大字宮前167番地1	☎0485-96-0121	
		11	渦巻正宗	五 井 酒 造 (株)	鴻巣市大字原馬室4091	☎0485-41-0133	
		12	草 香	関 東 銘 醸 (株)	北本市深井457	☎0485-41-2361	
川		13	喜代川	(資)名坂商店	川越市志多町19の1	☎0492-24-3800	
		14	鏡 山	鏡 山 酒 造 (株)	川越市新富町1丁目10の1	☎0492-22-0113	
		15	万代黒松	日 本 酒 造 (株)	川越市野田町1-10-5	☎0492-42-0204	
		越	16	琵琶のさざ波	麻 原 酒 造 (株)	入間郡毛呂山町大字毛呂本郷94	☎04929-4-0005
			17	来 陽	越 生 酒 造 (資)	入間郡越生町大字越生852	☎049292-2300
			18	万代菊	(有)佐藤酒造店	入間郡越生町大字津久根141の1	☎049292-2058
		19	君が旗	長 沢 酒 造 (株)	入間郡日高町大字北平沢335	☎04298-9-0007	
所	20	志ら滝	志ら滝酒造(株)	入間市河原町6番5号	☎0429-62-2016		
	21	友の井	(有)友野酒造店	入間市大字二本木1089	☎0429-34-2005		
	沢	22	天 覧 山	五 十 嵐 酒 造 (株)	飯能市大字川寺667の1	☎04297-2-2655	
		23	光 基	井 上 酒 造 (株)	飯能市本町3番9号	☎04297-2-2058	
		24	有 馬 錦	有 馬 錦 酒 造 (株)	飯能市大字飯能446	☎04297-2-2835	
25	平 泉	平 泉 酒 造 (株)	飯能市大字下直竹1	☎04297-2-2812			
比	26	敷 島 盛	(有)日野屋商店	東松山市松本町1丁目3番40号	☎0493-22-0010		
	27	武 蔵 鶴	武 蔵 鶴 酒 造 (株)	比企郡小川町大字大塚243	☎04937-2-1634		
	28	晴 雲	晴 雲 酒 造 (株)	比企郡小川町大字大塚178の2	☎04937-2-0055		
	企	29	帝 松	松 岡 醸 造 (株)	比企郡小川町下古寺7の2	☎04937-2-1234	
		30	惣 一	利 根 川 醸 造 (株)	東松山市大字松崎660	☎0493-22-0078	
秩	31	花 陽	(株)矢尾商店	秩父市上町1丁目5番9号	☎04942-2-2600		
	32	武 甲	武 甲 酒 造 (株)	秩父市宮側町21番27号	☎04942-2-0046		
	33	武 泉	齊 藤 貞 次	秩父郡横瀬村大字横瀬1955	☎04942-2-0385		
	34	晴 菊	栃 東 蒸 酒 造 肥 土 工 場	秩父郡吉田町大字下吉田3786の1	☎04947-7-0002		
父	35	秩父志ら藤	近 藤 銘 醸 (株)	秩父郡尚神村大字小森122	☎04947-9-0502		
	36	歴 長	和 久 井 酒 造 (株)	秩父郡吉田町大字上吉田3365	☎04947-8-0007		

● 埼玉の清酒一覽

支部別	番号	銘柄	醸造元	住 所	
熊谷	37	宝 雙	村山金兵衛	秩父部長壽町長壽573	☎04946-6-0029
	38	ひだり富士	川島酒造(株)	熊谷市大字佐谷田3868	☎0485-21-0611
	39	清 太 喜	榎田酒造(株)	熊谷市大字三ヶ尻1491	☎0485-32-3611
	40	花 遊	(株)藤崎櫻兵衛商店	熊谷市大字玉井2301	☎0485-32-3726
	41	奈 良 桜	長谷川酒造(株)	熊谷市大字下奈良60の3	☎0485-21-2323
	42	東 白 菊	(有)藤崎藤三郎商店	深谷市大字深谷129	☎0485-71-0136
	43	セ ツ 梅	榎田中藤左衛門商店	深谷市大字深谷22	☎0485-71-0015
	44	菊 泉	滝沢酒造(株)	深谷市大字西島1115の1	☎0485-71-0267
	45	本陣 清 正	熊山星金屋熊谷支店	熊谷市大字熊谷2041の1	☎0485-23-4311
	46	白 扇	(株)藤崎櫻兵衛商店	大里郡寄居町大字寄居925の2	☎0485-81-1755
	47	吉 野 橋	友竹酒造(株)	大里郡大里村大字下恩田669	☎0485-36-1011
	48	金大星正宗	丸山酒造(株)	深谷市大字橋瀬1323	☎0485-87-2144
	49	風紋 武蔵	武蔵酒造(有)	大里郡川本村大字本田4330の1	☎0485-83-3009
	児玉	50	君 千 代	美峰酒類醸造工場	児玉郡上里町大字勅使河原1801
51		千 里	筑豊酒造(株)	児玉郡児玉町大字児玉97	☎04957-2-0010
52		新 日 本	久 田 (名)	児玉郡児玉町大字児玉44の1	☎04957-2-1003
北 埼玉	53	天 仁	(株)横関酒造店	児玉郡美里村大字橋根3214の1	☎04957-6-1051
	54	辨 川	川端酒造(株)	行田市佐間2丁目9番8号	☎0485-54-3217
	55	雲 竜	熊山星金屋行田工場	行田市行田23番8号	☎0485-56-2178
	56	日 本 橋	横田酒造(株)	行田市桜町2丁目29番3号	☎0485-56-6111
	57	南 陽	南陽醸造(株)	羽生市大字上野郷5951	☎0485-61-0178
	58	大 漢	大漢酒造(株)	羽生市大字上手子林695	☎0485-61-0217
	59	花 菱	清水酒造(株)	北埼玉郡騎西町大字戸室1006	☎04807-3-1311
	60	力 士	(株)釜 屋	北埼玉郡騎西町大字騎西1162	☎04807-3-1234
	61	虹 の 宴	(株)東 亜 酒 造	羽生市西4丁目1番地11	☎0485-61-3311
	春日部	62	万 両	鈴木酒造(株)	岩槻市本町4丁目8番24号
63		神 亀	神亀酒造(株)	蓮田市大字馬込1978	☎0487-68-7115
64		清 竜	清竜酒造(株)	蓮田市大字間戸659の3	☎0487-68-2025
65		邦 楽	坂井酒造(株)	南埼玉郡荻窪町大字小林3862の2	☎04808-5-0149
66		竹 生 島	小林酒造(株)	久喜市本町1丁目1番16号	☎0480-21-0020
67		寒 梅	寒梅酒造(株)	久喜市中央2丁目9番27号	☎0480-21-2301
68		宝 富 貴	竹内酒造(株)	北葛飾郡幸手町南2丁目12番39号	☎04804-2-2576
69		初 緑	石井酒造(株)	北葛飾郡幸手町南2丁目6番11号	☎04804-2-1120
70		豊 泉	関口酒造(名)	北葛飾郡杉戸町大字清地2丁目1番16号	☎04803-2-0005
71		慈 玉	島根酒造(有)	北葛飾郡吉川町大字川野56	☎0489-82-0058
72	幸 松	石井酒造(名)	春日部市大字榎塚586	☎0487-54-1413	

◎参考図書

- \*新視点・日本の歴史 2 古代篇 白石太一郎・吉村武彦編 H5・3  
新人物往来社刊
- \*北武蔵における古式古墳の成立(児玉町史資料調査報告 古代第1集)  
菅谷浩之著 S59・3 児玉町教委・児玉町史編さん委員会刊
- \*渡来人と仏教信仰―武蔵国寺内廃寺をめぐって― 柳田敏司・森田悌編  
94・6 雄山閣出版刊
- \*古墳を歩く 東京新聞編集局編 94・2 学生社刊
- \*日本の古代遺跡 31 埼玉 金井塚良一編 S61・10 保育社刊
- \*新編埼玉県史 通史編1 S62・3 埼玉県刊
- \*新編埼玉県史 資料編2 S57・2 埼玉県刊
- \*邪馬台国時代の東日本 国立歴史民俗博物館編 91・11 六興出版刊
- \*東日本の古墳の出現 甘粕健・春日真実編 94・10 山川出版社刊
- \*武蔵野の青石塔婆 稲村担元著 S48・10 埼玉県郷土文化会刊
- \*板碑入門 小沢国平著 S42・11 隣人社刊
- \*石仏地図手帖 埼玉編 日本石仏協会編 S63・7 国書刊行会刊
- \*武蔵の古社 菱沼 勇著 S47・3 有峰書店刊
- \*埼玉の神社 大里 北葛飾 比企 埼玉県神社庁神社調査団編  
H4・7 第一法規出版刊
- \*歴史と人と 柳田敏司著 H6・9 さきたま出版会刊
- \*さいたまの名宝(国宝・重要文化財) 91・10 埼玉県立博物館刊
- \*さいたまの特産品 電通編 S55・7  
埼玉県自治振興センター内 県政情報資料室刊
- \*小川町の文化財 S55・11 小川町教委 編刊
- \*東武鉄道 「小川町」パンフレット
- \*日本酒全蔵元全銘柄 S58・12 主婦と生活社編刊